

『細川幽齋戲文』翻刻と注釈

林 達 也

極め

表書き

細川幽齋公書

細川藤孝正四位下兵部大輔ニ叙任ス／丹後田邊ノ城主 晩年幽齋玄旨法印ニ／任ス 和歌ヲ好テ頻リニ修学シ 終ニ堪能ニ至ル／東下野守常縁ノ流ヲ慕ヒ 古今傳受ヲ許サル／ 後亦從二位ニ叙ス 慶長十五年八月廿日卒す／算七十七才

此卷軸は玄旨法印還曆已後ノ書体ナリ／六十五才ニテ法印ニ叙ス 慶長中比流行ノノ事其時ノ風体ヲ徒然ニ書セ給フ 比類也／真筆ナリ 珍重無限卷軸ト可知矣

## 翻字本文

世はさかさまになるは、僧俗共に物しらすほめん事をは

ほめもせてそしらんことをほめてけり 先出家衆  
のつとめ勤行修理もせて大刀すきや大筋の

かたの付たる小袖にて紫帯のはゝひろくかしらを  
そらておつつかみ三日も寺に住ぬれば坊主や師

匠にからかひて里へくたるは隙もなや それを教

訓する時はたゝみのうへの手柄たて我も坊主も

命さへすつればくるしからさるとかほをあかめて

腹をたてさて日暮にもなりぬれば大酒のみての

あけくにはめらうへともにさすられてあまへかほ

する見くるしや 落はとく／＼をちもせておやこ

親類傍輩に見かきられてあけくには三禪とてや

やなひつへ参ると名付他國する それほとなりし

物なれば道よりかへりうそましり聲をなまりて

國雑談なからもしらぬ法文たて跡よりはくる事

## 加勘本文

世は逆さまになるは、<sup>1</sup>僧俗ともに物知らず、誉めんこと  
をば

誉めもせて、誇らんことを誉めてけり。先づ、出家衆

の勤め・勤行・修理もせて、大刀好きや、大筋の

形の付きたる小袖<sup>3</sup>にて、紫帯の幅広く、頭<sup>かしら</sup>を

剃らておつつかみ<sup>4</sup>、三日も寺に住みぬれば、坊主や師

匠にからかひて、里へ下るは隙もなや。それを教

訓するときは、昼の上の手柄だて、我も坊主も

命さへ捨つれば苦しからざると、顔<sup>5</sup>を赤めて

腹を立て、<sup>6</sup>さて日暮れにもなりぬれば、大酒飲みての

挙句には、女童<sup>めらうへ</sup>どもに摩られて、甘え顔

する、見苦しや。落はとく／＼落ちもせて、<sup>7</sup>親子・

親類・朋輩に見限られて挙句には、参禪とてや、

柳津<sup>8</sup>へ参ると名づけ、他國する。それほどなりし

ものなれば、道より帰り嘘まじり、声をなまりて

國雑談。半<sup>なから</sup>も知らぬ法文だて、後より剥ぐること

もたゝちこや女とこはたかにかたるさまこそおかしけれ  
物をしりたる人前には鼠の猫にあふことくかゝみ  
おもふそおかしけれ 四十五にあまりてのあけくには  
尼や古後家めうとなるそさたまれり 扱また

俗のうへにつき無用の事は青道心 あたこ精

進やとき一食 十七八の人よりもしゆへんの

珠数にしうちけさ 外様といへと名聞に口にはつぶ

く／＼にやらんとなへかほなるつらくや 扱身の

なりをみてあれはかしらはゆはて帯をさき水

をも付すたはねつゝひたいを。ふしやう物 十川

かしらと名を付て鑓をはつかてふしやうをは十

川殿さへ此ことくつふりをとらぬ／＼といふなれば 扱

出立を見てあれはわたの頭巾をせぬはなし 白

きあはせに十里見の波の袴の帯なかくつるの

なかさの大刀きぬのきんちやくはやり物 もつかう

つはにうてぬきをから紅にて入にけり 黒きぎや

もただ、児や女と声高に語る様こそかをしけれ。

物を知りたる人前には、鼠の猫に遭ふごとく、屈み

思ふぞをかしけれ。四十五に余りての挙句には、

尼や古後家、夫婦になるそ定まれり。さてまた

俗の上につき、無用のことは青道心。愛宕精

進<sup>10</sup>や齋一食、呪遍の

数珠に呪字(種子)袈裟、外様といへど名聞に口にはつぶ

つぶ何やらん、唱へ顔なる面憎や、さて身の

形を見てあれば、頭は結はで紙を裂き、水

をも付けず束ねつつ、額を抜かず無精者。十河

頭と名をつけて、鑓をばつかで無精をば、十

河殿さへこのごとく頭をとらぬとらぬと言ふなれば。さ

て

出で立ちを見てあれば、綿の頭巾をせぬはなし。白き

袷に唐棧止めの波の袴の帯長く弦の<sup>11</sup>

長さの大刀、絹の巾着、流行もの。木瓜

鏝<sup>13</sup>に腕貫を唐紅にて入れにけり。黒き脚

はんに袴きす 主のともする時だにもきさるいしやう  
 をとり出し私ありき隙もなや とも傍輩との  
 物語 何そとききは主の事おやをそしるそ  
 いとにくき。<sup>おやかた</sup>おやこの中にもめうとの中の物語  
 きんくもしらすさし出て年のよりたる物よりも  
 指出口をたよくなり 臆病物のくせとして喧  
 嘩聲にて酔狂し身のほとしらぬけなけたて  
 けんし□□にかくれなき物を物しりたての雑  
 談をきくこと／＼にさしかしりする人たちの  
 つらにくや 我か物もちての其上に無用とみえし  
 若衆すき するもしらぬも茶湯とて闇座敷  
 の四てう半つほのうちにはいな篠つたやふたうを  
 ははせつゝいかけをしけるてんとりやとひんの。<sup>口の</sup>かけ  
 たるを面白しとてもてはやしよき物もたぬ  
 わひすきはせめて事にやくにたつ道具一つも  
 苦勞せて伊勢てんもくや古ちやしやくしから  
 き物の水かほし三服たつれば水あまり座

絆に袴着ず。<sup>14</sup> 主の供する時だにも、着ざる衣装  
 を取り出し、私歩き、隙もなや。友・朋輩との  
 物語、何ぞと聞けば主のこと、親を誘るぞ  
 いと憎き。<sup>15</sup> 親方・親子の中にも、夫婦の仲の物語、  
 禁句も知らず差し出て、年の寄りたる者よりも、  
 差し出口を叩くなり。臆病者の癖として、喧  
 嘩聲にて酔狂し、身の程知らぬ健気だて、  
 けんし□□に隠れなきものを、物知りだての雑  
 談を聞くことごとくにさし齧りする人たちの  
 面憎や。<sup>16</sup> 我が物持ちてのその上に、無用と見えし  
 若衆好き。知るも知らぬも茶の湯とて、闇座敷  
 の四疊半、<sup>17</sup> 坪の内には猪名の篠・蔦や葡萄を  
 這はせつゝ、鑄掛をしける。<sup>てんとり</sup>釜や土瓶の口の欠け  
 たるを、面白しとてもてはやし、良き物持たぬ  
 佗数寄は、せめてのことに役に立つ道具一つも  
 苦勞せで、伊勢天目や古茶杓、信楽  
 物の水こぼし、三服立つれば水余り、座

敷もたゞみもぬれわたるほとにちいさき下水  
 にて三人よりも人あれば中々會もせざりけり  
 扱けんとのくせとしてこせいなれともつくる  
 はす菴境のささやなんとをは昔かゝりとそし  
 りをきあはひの貝やかんなかけ足を付ての  
 かさり物くわれぬ花や枚の葉を色ゑにませ  
 て物入す 物語には何やらんしていかしやうふもつ  
 けいかたるましゆんきよ。かさうくわ玉かんか山水なとゝしらざりし  
 耳にも入ぬ雑談にきわめて我もしらざりし  
 きたうの文字は面白やと年にもたらぬ人  
 たちのさゝやきありくおかしさよ 取分此比はや  
 る物鉄砲鎌鍬大脇指地白かたひらあを  
 てのこいかしらつゝまぬ物はなし 軍配たてや  
 易雑談きんしんもたぬ人はなし 夏のあそひ  
 のてうらひに富士こりなとゝかこつけて  
 川水などにつかりつゝ利生はしらす秋風の  
 ひやゝかに吹比はたゞ必おこりふるふなり 中風

敷も畳も濡れわたるほどに小さき下水  
 にて、三人よりも人あれば、なかなか會もせざりけり。<sup>18</sup>  
 さて慳貪の癖として、小勢なれども繕  
 はず、庵境の篠家などをば、昔がかりと誇  
 りおき、鮑の貝や、<sup>19</sup>鮑掛け脚を付けての  
 飾り物、食はれぬ花や杉の葉を色絵に混ぜ  
 て物入れす。物語には何やらん、子庭が菖蒲、牧  
 谿が達磨、舜拳が草花、玉碯が山水など、<sup>20</sup>知らざりし  
 耳にも入らぬ雑談に、きわめて我も知らざりし  
 虚堂の文字は面白<sup>21</sup>やと、年にも足らぬ人  
 たちの囁き歩くをかしさよ。取分けこの頃流行  
 るもの、<sup>22</sup>鉄砲・鎌・鍬・大脇指、<sup>23</sup>地白帷子・青  
 手拭、<sup>24</sup>頭包まぬ者はなし。軍配たてや  
 易雑談、<sup>25</sup>金神持たぬ人はなし。夏の遊び  
 の頂礼に、富士垢離などとかこつけて、  
 川水などにつかりつゝ、利生は知らず、秋風の  
 冷ややかに吹くころは、ただ必ず瘧ふるふなり。中風

にならぬは利生とていゝて心をなくさみぬ

道俗男女にいたるまではやり物とて法花衆一向

衆やしんせい衆せうねん門徒となそらへて卅六

のしゆすはもちきわめておやにもふかふにて

信とりたてのうたてさよ 侍ほとなる物ともか

弓矢はとらて連歌数寄物見といへばかゝさりし

勸進能や手猿染我が身をやつしたりければ

身のくつおるゝもしらすして一聲一つうち

けるを鼻ついせうにほめければすはやまこ

とゝ心得て薪後日の猿染も皆々へたにて

ありけると人をそしるそ無用なる 我かみの

上の事はせてしやうるり平家曲舞をとり

くひはう用もなや せり細工にやふくすし

はかり目一つもしらすして薬をつかへときゝも

せず あまさへくすしころしつゝとかのほどこそ

おそろしや 脈のよしあしきへしらてけたい学文

口いかり難経そもん五運りきわさいのしなん

にならぬは利生とて言ひて心を慰みぬ。

道俗男女にいたるまで、流行りものとして法花衆、一向

衆や真盛衆<sup>26</sup>、称念門徒<sup>27</sup>と準へて、卅六

の数珠は持ち、きわめて親にも不孝にて

信とりだてのうたてさよ。侍ほどなる者どもが

弓矢は取らで連歌数寄、物見といへば欠かざりし。

勸進能や手猿染、我が身をやつしたりければ、

身の頽<sup>くづ</sup>るるも知らずして、一声一つ打ち

けるを、鼻追従に誉めければ、すはや真<sup>まこと</sup>

と心得て、薪・後日の猿染も皆々下手にて

ありけると、人を誘るぞ無用なる。我が身の

上のことはせで、浄瑠璃・平家・曲舞をとり

どり誹謗、用もなや<sup>28</sup>。せり細工に藪医師<sup>くすし</sup>

秤目一つも知らずして、薬を使へど効きも

せず、剩さへ医師殺しつゝ、罪科<sup>とが</sup>のほどこそ

恐ろしや<sup>29</sup>。脈のよし悪しきへ知らで、外題学問

口いかり、難経・素問・五運六氣・和剂之指南・

たいせいろんさつひやうしなんやくしやうろん  
 しようてんほうなんとはかたのごとくもよみぬると  
 へたのくすしのくせとして口手柄をそいゝにける  
 細工をするに用にたつことをはゑせすして筆  
 こほし竹のたかきしんたてにきわをきなと  
 をけすりをきたれともいはすさし出す  
 心のおくの見くるしや ひとり持たるめをさへも  
 やしなひかねて二女ふつなあくる日もくるゝ日も  
 かしましくせりあふこゑはたえもせず 道のち  
 からはそもそもなや猿染さるぞめなどのみの上も我らか  
 所作は得せすして平法馬や鷹はくらう  
 五常もしらて木刀に新當りうの大事には  
 ひとつの太刀も存するとしらぬ人にはかたり  
 つゝ適貴人の前にての物語にはひちしり  
 たてのいらぬ事にて有けるぞ 抑はくち  
 双六は昔よりしてきらふとはみな人の存知  
 のうへとてもひわかき物をそゝなはし夜よる

大成論・察病指南・薬性論  
 正伝法30などは形のごとくも読みぬると、  
 下手の医師の癖として、口手柄をぞ言ひにける。  
 細工31をするに、用に立つことは得せずして、筆  
 毀こぼし、竹（丈？）の高き芯たてに、狐燭きわ置きなど  
 を削りおき、誰ともいはず差し出だす  
 心の奥の見ぐるしや。一人持ちたる妻をさへも  
 養ひかねて二女、明くる日も暮るる日も  
 姦かんしく競り合ふ声は絶えもせず。道の力  
 はそもそもなや、猿染さるぞめなどの身の上も、我らが  
 所作は得せずして、兵法・馬や鷹・伯勞33、  
 五常も知ら34で木刀に、新当流35の大事には  
 一つの太刀も存36ずると、知らぬ人には語り  
 つつ、たまたま貴人の前にての物語には、肘尻  
 立ての、いらぬことにてありけるぞ。さて博打・  
 双六は昔よりして嫌ふとは、皆人の存知  
 の上とても、ひ若わかき者を唆そなはし、夜

晝差別なくうてはうちほうくるは道理

なり なすへき錢のあらされはあけくの

はては喧嘩していなんとのみそあんしける

にあふあいてのなきまゝに善光寺をそ心

さす 此比小路にはやる物くわんたいてたて

みしかくこまつ此なりと人々の事ことに

いふおかしさよ 都のこと葉といふなから

おちやらしませと人をよふ 昔かいまに至る

まてさめすはやるは東山清水北野嵯

峨くらま畠山辻<sup>子</sup>の物 はうへんふのやき

ころ十徳たかきあしたに誓願寺つるかけ

などのもてる物 やなきの酒は面白や酒に

酔たる事なれば口に任して物はいふおかし

くそこそいふにけれ

玄旨法印

昼差別なく打てば、打ち呆くるは道理

なり。済<sup>な</sup>すべき錢のあらざれば、挙句の

果ては喧嘩して、去なんとのみぞ案じける。

似合ふ相手のなきまゝに善光寺をぞ志

す。<sup>37</sup>この頃小路<sup>38</sup>に流行るもの、「くわんたいてたて

みしかくこまつ此なり<sup>39</sup>」と、人々の事々に

言ふをかしさよ。都の言葉と言ひながら

おちやらしませと人を呼ぶ。昔が今に至る

迄、さめず流行るは東山・清水・北野・嵯

峨・鞍馬<sup>40</sup>、畠山辻<sup>41</sup>の者、方便布囊<sup>42</sup>やき

ころ十徳、高き足駄に誓願寺、弦懸け

などの持てるもの。柳の酒は面白や。酒に

酔ひたることなれば、口に任してものは言ふ。をかし

くぞこそ言ひにけれ。

玄旨法師



## 注釈

- 1 「世はさかさまの人のいひなし／雪折れの竹をそのまま牆にして」(真如旧蔵本『犬つくば集』)
- 2 「身を修め正す」意か。「大駄愚老が年来の修理の道、ただこの条々の外はまたく他の用意なく候」(『毎月抄』)
- 3 大柄な模様のついた小袖
- 4 擱めるほどに伸びた髪
- 5 「僧兵」を想定するか
- 6 「人毎にたとひ腹立つ事ありとおもてあかめて声たかくすな」(『西明寺殿御歌』)
- 7 「落」は「出家落ち(還俗)」の意か
- 8 会津柳津円蔵寺(福島県河沼郡)・奥州柳津宝性院(宮城県本古郡)・常陸柳津日高寺(茨城県那珂郡)の三虚空蔵を順礼することか。「奈良・長谷の隔夜する法師、南円堂より六道迄つれて雑談之處、彼者は当国片岡の生まれ、信貴山先達の所に九才より奉公了、奥州柳津虚空堂に一年二百日参籠了」(『多聞院日記』永禄九年五月二十三日)
- 9 「ちご若衆あま入道のがらだてざうごんするはきかれざりけれ」(『見咲三百首』)、「児若衆女や尼の手柄だて返す返すも聞かれざりけれ」(『幽斎御教誡の歌』)
- 10 「太閤の御時、一徳といふ者、別して御気に入りたり。ある朝、生鶴の汁を食はせよとあれば、愛宕精進をいたす。下されまじきと申し上ぐる」(『醒睡笑』卷二「貴人の行跡」)。「正五九月とて二十四日に思ひ立ち、愛宕参詣とて一日二日の旅用意」(『西鶴置土産』卷二)等
- 11 本文「十里見」は「望遠鏡」。ただ、この意は、『日本国語大辞典』を始めとして十九世紀の用例しか見られない。「とほざとみ」と読み、「唐棧留」と解してみた。「ひつくりかへさう餌飯の浦波／さんとめの袴も古きこしの山」(『二葉集』、『日本国語大辞典』用例)、「此棧留の袴は。借り物」(『鹿の巻筆』)。
- 12 本文「つる」に「弦」を当て、「三味線ほどの長さの大刀」と解してみた。ただし、当代用例は見えていない。
- 13 「御脇指は木瓜鏢、黒作」(『神谷宗堪筆記』)
- 14 このあたりの描写は、『彦根屏風図会』の立ち姿の若衆や、伝本多平八郎の姿等を思い起こさせる。ともに紅の腕貫を付けた長い太刀を携え、額には角を入れ、袴を着けていない。所謂「歌舞伎者」の風俗である。「関白様御衣裳(略)御帯は紅也。い

- かにも長くし、一方長く結、御膝の下迄に有。御ぐしには萌黄のしじらの頭巾、御髪はゆはせられず、御小袖長くして御足みへず」(『神谷宗堪筆記』)
- 15 「よい気質なるもの主親の事は勿論、人そしらず」(『大枕』)、「身のとがをおもひもしらで親主をそしる人こそはぢのはぢなれ」(『西明寺殿百首』)
- 16 「何事もわれしりがほの口たたきつめたるたるはならぬ物かな」(『見咲三百首和歌』)
- 17 「昔は横六帖敷也。中比より四帖半になる也」(『分類草人木』)
- 18 「大名富貴の人、数寄は詫びたるが面白しと云ひて、座敷も膳部も貧賤のまねを専とす。然るべからず。有るべき様こそ面白けれ」(『分類草人木』)
- 19 「正月五日 昼 子日 三疊敷 日野殿 幽斎 宗久 一、床に足付にのしあはび」(『南方録』「会」)
- 20 「子庭 石菖蒲の絵 平野道是に在り」、「舜虚筆 芙蓉の絵 彩色の絹地 堺油屋常悦に在り」、「玉碯八幅の絵 一 平沙落雁 関白様(以下、所謂瀟湘八景の所有者が列挙されるが、省略)」、「墨絵、玉碯子庭・牧谿・月山也」(以上、『山上宗二記』)
- 尚、舜虚の「芙蓉」は「草花」と呼ばれたと言う。また、『山上宗二記』に牧谿の「布袋」などが載る)
- 21 「虚堂 一幅 関白様 本は幾嶋所持す。天下一名物也」(『山上宗二記』)
- 22 『梁塵秘抄』『二条河原落書』以来の常套句
- 23 『諸大名出仕記』には、「年寄には白き帷先可然候。(略)又若人等紺地白の帷子よく候」とある。
- 24 「軍法だて」に同じか。
- 25 本文「きんしん」。「金神(こんじん)」と解しておく。
- 26 十五世紀の天台僧真盛の流れを汲む宗派。「未刻に真誓衆来」(『鹿苑日録』慶長七年六月十三日)
- 27 十六世紀の浄土宗捨世派僧称念の流れを汲む宗派。
- 28 十六世紀前半成立の『条々聞書(宗五大雙紙)』には「若人は弓馬鞠又は歌道の事、兵法、包丁又は当世はやり候大つづみ、大こ、笛、尺八、音曲なども、ちとは稽古候て可然候。うたひはもじのあつかひ、口のうち以下口伝肝要候」とある。一方、『可笑記』には「彼のたはけめがすき好むしなぢなは、ばくち・はうびき・勝負事、めくら・尺八・朝寝・夜ありき、我するほどの芸能を、人びとなぶりほめつれば、鼻をたかめて高慢し、それしやのやうに身をしなす」とある。

- 29 「くすしは人を殺せど薬は人を殺さず」(『毛吹草』)、「薬人をころさずときく医者ならば聊爾をするな療治よくせよ」(『後撰夷曲集』)
- 30 「難経・素問」は医学四部の書。「五運六気」は宋代性理説に基づく病理論。「和劑之指南」は宋代の『和劑局方』解説書。「大成論」は元代の『医方大成論』。「察病指南」は『察病論』解説書。「薬性論」?。「正伝法」は本文「しうてんほう」。宋代『医学正伝』の解説書か。十六世紀の医師曲直瀬道三の塾「啓廸院」では『察病指南』・『和劑之指南』等が教科書となっていたといふ(森谷尅久『京医師の歴史』)。「我等若き時、形の如く学問を致しける。読み置く医書は何ぞ。先づ一番は大成論に脈経、能毒、運氣論、序例、回春、医学正伝、或問に素問、靈枢、諸本草、医林集要、源流まで、風の吹夜も吹かぬ夜も、雨の降る夜も降らぬ夜も、灯火を挑げつつ、眼を晒し努めたり」(『竹斎』)。「やぶくすし物しりがほの殊勝ぶりかへすがへすもみられざりけり」(『見咲三百首』)
- 31 「騎馬・細工・料理包丁は男芸能の随一なり」(『遊学往来』)。
- 32 「南京人、よき蠟燭を起椀といふ」(『秉穂録』)
- 33 鴟
- 34 「兵法の極意は五常の義にありとこころのおくに絶えずたしなめ」(『兵法道歌』)
- 35 塚原卜伝(天正初年八十余歳で没)創始の剣術流派。
- 36 「卜伝が弟子の中に勝れた者なる、一の太刀の極意を授くべしと思ひけるに」(『常山紀談』卷之二十三)
- 37 「これは善光寺の住侶にて候、この寺には諸国より身を捨て人多く集まり候」(謡曲『柏崎』)
- 38 遊里。
- 39 「緩怠、手立て短く、小松この形」と読むのか。
- 40 『竹斎』などの京内参りを思わせる。
- 41 上杉家本『洛中洛外図』左隻五扇に「はたけ山のつじ女郎」として、遊里が描かれている。これについては、武田恒夫「初期洛中洛外図屏風の展開」(『日本屏風絵集成』第十一卷所収)に言及がある。
- 42 便利袋

## 付記

翻刻の底本は、熊本大学寄託北岡文庫蔵の一軸である。底本は無題。仮に、『細川幽齋戯文』とした。古典文庫『中世近世道歌集』に資料編纂所蔵「細川侯爵家文書一」を底本とした翻刻がある。ここでは「幽齋長歌」とされている。書誌・注釈など補うべきことがまだあり、後日を期したい。本稿はとりあえず、本文の紹介とする。尚、「細川幽齋 中世歌学大成の大名」(『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 平成11・10)で『細川幽齋戯文』について若干触れたところがある。参照願えれば幸いである。また、井上宗雄「中世教訓歌略解題 付・教訓歌小考」(立教大学『日本文学』24 昭和45・7)に言及がある。